

商店街を巻き込んだ食育の取り組み

世田谷区ぱくぱく健康キッズ&タウンの事例

女子栄養大学栄養学部

新潟医療福祉大学医療技術学部

武見ゆかり

村山 伸子

世田谷区世田谷保健所

独立行政法人国立健康・栄養研究所

千葉大学教育学部

小林 陽子

佐々木 敏

岡田加奈子

抄 録：子どもたちを含む地域住民の望ましい食習慣形成をねらって、東京都世田谷区内にモデル地区を設定し、小学校6年生を対象に、学校を拠点として商店街を巻き込んだ食に関する学習を実施してきた。その学習内容を紹介し、そうした学習から児童や関係者は何を学んだかというプロセス評価の結果を報告する。学習プログラムは、教室での食に関する基本的な学習と、商店街へ出かけてのしらべ学習、及びそうした学習成果を商店街で地域住民に発信する活動からなる。保健所と研究者からなるプロジェクトチームが、学習への支援、地域商店街等との連絡調整を担当した。これらの学習により、児童は社会の食の営みの一端を知り、その学びを再び自分の食生活につなげた気づきを示す者が多かった。児童の学習に参加した保護者も多くの学びを得ていた。また、商店街組合役員、スーパーなど地域の関係者もこうした学習を好意的に受け入れ、次年度以降の継続を希望した。

緒 言

今日、いわゆる「食育」への関心が社会に高まっている。「食育」のとらえ方は、人によってさまざまであり、いまだ社会として一定のコンセンサスを得たものではない。したがって、理論的、概念的な整理は今後の課題として残るが、子どもだけでなく成人も含めて、いま、心身の健康とのかかわり、あるいは真に人間らしい豊かな食を考えるうえで、食生活、食べることが社会の重要な課題になっていることは間違いないだろう。

著者らは、子どもたちを含む地域住民の望ましい食習慣形成をねらって、東京都世田谷区内にモデル地区を設定し、学校を拠点として商店街を巻き込んだ食に関する学習と、子どもたちの学習成果を活用した地域の食環境づくりに取り組んできた1)。本報では、そうした学習の実現のためにどのような連携や調整が行われたか、また、そうした学習から児童や関係者は何を学んだかというプ

ロセス評価の結果を報告する。

方 法

本研究は、地域住民の望ましい食習慣形成をねらって、行動科学にもとづく栄養教育と食環境づくりを統合した地域介入プログラムを開発、実施し、その有効性を検討することを目的として平成14年から3年間にわたり実施している研究¹⁾の一部である。介入地域は、東京都世田谷区内の2小学校とそれぞれの学区である。世田谷区では、平成13年に、健康日本21の地方計画である「健康せたがやプラン」を区民参画の手法を取り入れて策定した。その中で4点の重点的取り組みが示された。そのうちの2点、「子どもの頃からの生涯を通じた生活習慣の形成」と「食を通じた健康づくりの推進」を組み合わせた具体的な事業として本研究は実施されている。

事業の実施にあたり、世田谷保健所のスタッフと研究者からなるプロジェクトチームを立ち上げ

推進してきた。具体的には、研究全体の概念枠組みの作成とデザインの設計²⁾、それを実現するためのフィールドの確保、ベースライン調査の実施、その結果をふまえ学校の教員らと共同で学習プログラムを作成・実施、地域の商店街と学校関係者からなる協議会の設置、それらのプロセス評価、などである。

1. 食に関する学習プログラム

学校を拠点として商店街を巻き込んだ学習に関する概念枠組みを図1に示した。まず、教員、学校栄養職員らと協議を重ね、児童への学習プログラムを開発した。学習者は6年生児童とした。児童は、教室での食に関する基本的な学習と、商店街へ出かけてしらべ学習を行い、そうした学習成果を、今度は商店街で地域住民に発信していく。商店街関係者には児童の学習を支援し、児童の学習成果発信の場を提供してもらった。同時に保護者にも、可能な限り児童の学習に関与してもらい、基本的な情報を共有してもらうことをねらった。このようにして、児童の学習を中心にしながら、結果として、地域全体に食に関する適切な情報と健康づくりに役立つ食物(商品)が増えることで、地域住民全体の食生活の向上をねらったプロジェ

クトである。いい換えれば、学校を拠点として商店街を巻き込んだ「健康なまちづくり」プロジェクトである。児童が覚えやすく親しみがもてるように、プロジェクトの通称を「ぱくぱく健康キッズ&タウン」と名付けた。

モデル地区は2地区あり、それぞれの小学校の教育目標や地域特性にあわせて、学習プログラムの展開は若干異なる。表1に、S小学校での食に関する学習の流れを示した。

S小学校の6年生は2クラス65人である。将来の「なりたい自分」に向かって、現在の食生活の課題をみだし、その解決のために、食に関する基本学習とグループワークによる課題解決学習を行った。食に関する基本学習としては、食生活指針でも推奨されている主食・主菜・副菜の組み合わせによるバランスのよい食事と、針谷・足立らによる「弁当箱ダイエット法」^{3,4)}を応用した自分の適量把握の学習を行った。

また、平成14年度に実施したベースライン調査結果^{5,6)}で、子どもたちに野菜摂取不足や野菜嫌いがみられたため、野菜に親しむことをねらって、毎月「旬」ポスターの作成を行った。子どもたちが実際にとりあげた食物は、野菜だけでなく、果

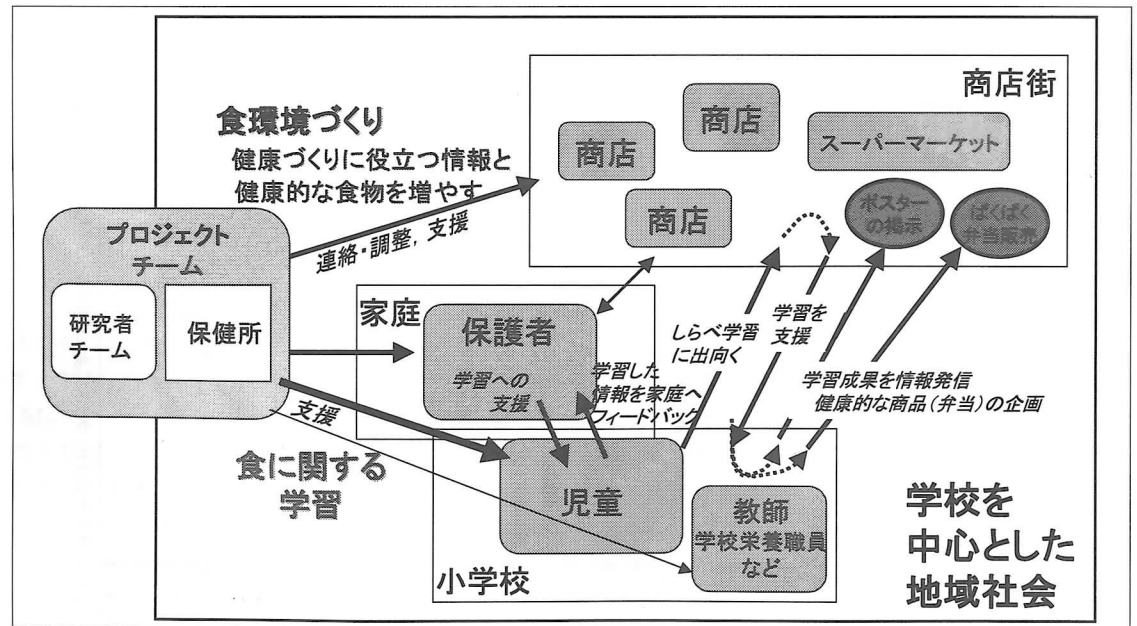


図1 学校と地域が連携した食に関する学習の枠組み
世田谷区「ぱくぱく健康キッズ&タウン」の事例

表1 S小学校における食に関する学習 全体の流れ

月	食に関する学習	教科	学習内容	関わった人 (商店街関係者以外)	商店街とのつながり
5	旬の食材ポスターづくり (毎月・商店街・スーパーに展示)	総合	食べ物の旬とその意義の理解をねらいとして、毎月旬ポスターを作成し、地域の商店街やスーパーに貼る。地域の人々と交流し、情報交換する	クラス担任 保健所スタッフ、研究者	旬ポスターの掲示を依頼に行く (毎月)
6	「なりたい私」	総合	将来の「なりたい自分」に向かって、現在の自分の食に関する課題を見つけ、それを友人と共通する課題へ発展させ、課題解決に向けてグループで、調べ学習をする	クラス担任 研究者	
7	「我が家の簡単おすずめおかず」	家庭科	児童の調理した料理を含めた約30品の料理を使って、食べた弁当の設計図を構想し、ハイキング形式で弁当箱に詰める。学校給食の器に移しかえ、いつもの給食の量との違いを考え、自分の食事の課題に気付くことをねらう	クラス担任 保健所スタッフ 家庭科教諭 保護者 研究者	協働会で旬ポスターへの地域の人の反応が議題となる ⇒ 担任が児童に伝える
9	パートIIにむけての学習 主食・主菜・副菜の学習	家庭科 総合 家庭科	1 主食・主菜・副菜とは何かを知る 2 食物大料理カードを用いて、主食・主菜・副菜・その他の一品を組み合わせて献立を考える 3 はくばくパートIで作った料理を主食・主菜・副菜別、調理法別に分類する	家庭科教諭 クラス担任	
10	1 食分の適量把握の学習		1 パートIの弁当には、料理や食品バランスの問題があったことを理解する。 2 弁当箱タイムアウト法の5つのルールを知る 3 5つのルールに従って、自分にあつた容量の弁当箱に給食のおかずをしっかりと詰める	家庭科教諭 クラス担任	
11	はくばく弁当パートII 料理の決定	家庭科・総合	家族と考えた、我が家のおすすめ簡単弁当おおかずのレシピを作成、グループ毎に検討し、はくばくパートIIに向けて、買い物など準備のための役割分担を決める	家庭科教諭 保護者 研究者	スーパーの店長が、公開授業日にゲストティーチャーとして参加。 弁当企画へのコメントを行う 児童の企画が、実際に商品としてスーパーで販売される
12	「なりたい私」調べ学習グループ発表	家庭科・総合	今までの学習内容を生かして、自分の心身の状態に合った弁当を構想し、実際に弁当箱に詰めて、食事として実践するランチハイキングを実施。	家庭科教諭 保護者 研究者	
1	はくばく弁当パートII	家庭科・総合	今までの学習内容を生かして、グループで地域の人に食べてもらいたい弁当の企画し、発表する	家庭科教諭 保護者 研究者	
2	はくばく弁当パートIII	家庭科・総合		家庭科教諭 保護者 研究者	
3					

担任の考え方により、クラスによって各学習の時期や内容に、多少に違いが生じている

物、魚類におよび、食物についてさまざまな角度から深く学ぶ機会になった。これらの旬ポスターを、毎月、学校周辺の3商店街の商店とスーパーに児童自身が届け、S小学校児童の作品として掲示してもらった。

さらに、前述の基本学習をふまえ、グループごとに、地域の人々に食べてもらいたい「健康ばくばく弁当」企画案作成の学習を行った。公開授業日に小学校に隣接するスーパー店長をゲストティーチャーとして招待し、企画案の発表を行ったところ、店長から「実際に売らましよう」と提案があり、児童が企画した「健康ばくばく弁当」の販売が12種類、12週間にわたって実施された。弁当には「S小学校6年生考案 ヘルシーバラエティ弁当」「1日元気弁当」といったように児童が考えた名前と、「野菜たっぷり130g」「脂肪は控えめ」といった栄養的特徴を示したPOPが付けられて販売された。弁当の1日平均販売個数は15個で、売れ残りはなかった。

もう1校のY小学校でも、S小学校と同様の食に関する基本学習を行ったが、地域とのつながりでは異なる展開がされた。「Myストア大作戦」と銘打った学習プログラムで、野菜を共通のテーマとし、商店街の食料品店や飲食店、地域の病院、保育所、老人福祉施設、市場などへ出向き、野菜をどう扱っているか、野菜についてどのような考え方をしているかなどを聞き取り調査した。6年生3クラス120人を、各クラス9グループに分け「Myストア」を決めて実施した。地域でのしらべ学習には、教員、保護者、プロジェクトチームのメンバー（保健所職員や研究協力者ら）が引率した。そして、しらべ学習の成果をポスターや料理レシピに表現して、再びそれぞれの「Myストア」に届け掲示してもらった。また、こうした「Myストア大作戦」の学習と食の基本学習の総括として、12月の1日を使って、「はくばく新鮮発表会」を体育館で大々的に実施した。発表会には、保護者、地域の関係者らが訪れた。また、他学年の児童も授業時間を利用して6年生の学習成果を見学した。

2. 以上の学習のプロセス評価

商店街を巻き込んだ学習のプロセス評価として、

プロジェクトチームによる支援内容の検討と、児童、保護者、商店街関係者らの受けとめ方に関する検討を行った。

プロジェクトチームによる支援内容の検討は、実際に実施した支援内容を、学校への支援、商店街との連携調整及び支援、地域への普及啓発の3つに分けて整理した。

児童の受けとめ方は、各授業時のワークシートの記述、および16年2月に実施した事後調査で「はくばく健康キッズ&タウンで学習したことの中で楽しかったこと、心に残っていることがありますか」という質問への自由回答の中から、商店街とつながった学習に関する記述を拾い出し整理した。保護者の受けとめ方も、同様に、児童の学習の参観・参加時に記入してもらった調査票から関連の記述を拾った。商店街関係者、スーパーについては、15年度末にプロジェクトチームのメンバーが聞き取り調査を実施し、児童の学習への支援に関する意見を整理した。

結果

1. プロジェクトチームによる支援

図2に示すように、学校への支援としては、新しい教材の紹介や学習プログラムの開発といった技術的支援、プロジェクトチームメンバーが教員と組んで授業を実施したり、地域への引率を分担するなどの人的支援、ポートフォリオ評価用ファイルの提供やポスターのカラーコピー代など経済的支援を行った。また、食に関する学習では家庭をいかに巻き込むか、保護者にいかに気付いてもらうかが重要なポイントであり、そのための支援をしてほしいという教員の要望に応え、児童の基本学習と同様の情報を保護者にも提供、保護者から要望のあったヘルシー料理教室の開催など、プロジェクトチームが家庭の巻き込みを積極的に行った。

商店街との連携調整、支援では、商店会組合役員会と交渉を重ね、児童の学習の場、ならびに情報発信の場を確保した。これにより、学校だけで地域に出向いた学習を行う場合、連絡不足で地域から苦情が寄せられたりする、という問題を回避した。また、S小学校の児童が企画した「健康ば

くぱく弁当」の販売に当たり、保健所とプロジェクトチームの管理栄養士が、食品構成や栄養素構成のバランスを確認し、調整が必要な場合には調整を行って児童とスーパーの了解を得、スーパーの惣菜部門に弁当作成の指示を出した。これにより、味や栄養面からみて「健康ぱくぱく弁当」の名に違わぬ商品の販売を実現できた。

また、保健所から積極的に、自治体の意思決定者である区長や議会、或いは自治体の他部署にこうした活動の広報を行った。また、マスコミへの情報提供を行うことで、学校や商店街関係者のやる気を鼓舞するよう支援した。

さらに、こうした学習をより充実させ、地域全体の健康づくりにつなげることをねらって、学校関係者（教員、PTA 役員など）と商店街の商店会代表、スーパー代表から構成される推進協議会を両地区に設置し、保健所が事務局として調整、運営を担った。協議会があることで、子どもの情報発信に対する地域側の反応を、学校関係者が直接に知ることができ、次の学習に生かすことができるようになった。

2. 児童の気付き

商店街や地域とつながった学習を通じて、社会の食の営みの一端を知り、その学びを再び自分の

表2 児童の感想や気づきの例

(Y小学校で、学習全体の総仕上げに当る「ぱくぱく新鮮発表会」を終えた時のワークシートから、商店街との関わりに関する記述の例)

- ・総合の学習で（外にしらべ学習に行つて）いろいろなことを教えてもらったので、これからも食事のことを気にしていきたいです。
- ・（インタビューに行った店について）お店に行ったら、もっとバランスよいメニューを食べようと思います。もっと身近なお店の食品も考えて選ぼうと思います。
- ・お店の人に教えてもらって、今は、栄養のあるものが人気があるんだとわかりました。
- ・D店（店の名前）は、四季によって食べ物の材料が違うということが初めてわかったので、来ていないおじいちゃんやお父さんにも、教えてあげたいです。
- ・F荘（老人ホーム）が、お年よりのためにかなりカロリーのことを考えていたなんて、全然知らなかった。僕も食事のとき、健康に気をつけたいです。
- ・K病院で、こんなに食事のことを考えているなんて知らなかった。次から食事のときには、健康的な食事を食べたいです。
- ・Y農園に行くまでは、野菜があまり好きじゃなかったけれど、Y農園のおじさんが栄養について教えてくれて、野菜を食べると後に良いことがおきるということを知った。これから、野菜をたくさん食べて健康でいたい。

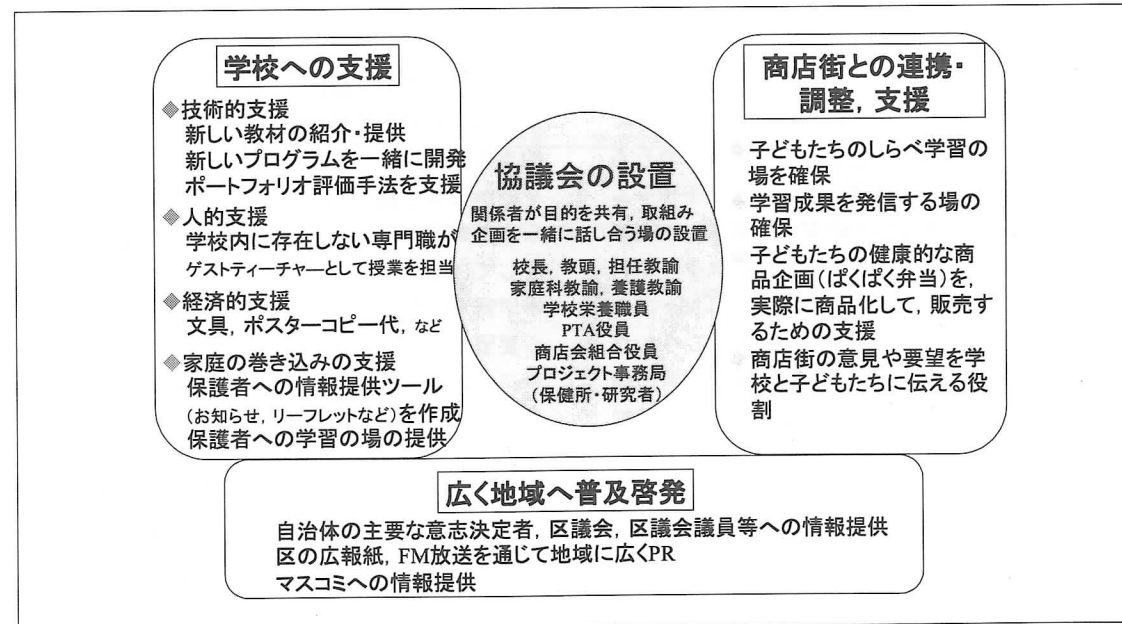


図2 プロジェクトチーム（保健所・研究者）の支援内容

表3 商店街側の反応

インタビューの対象	S地区	Y地区
プログラムで良かった点	児童が自分のポスターを見て楽しそうに話していたので、良かった 児童のポスターやPOPは関心度が高く、客とのコミュニケーションが増えた。年配の客から「良い取組み」だと言われた食レンジャーの缶バッジは子どもに人気があった 取り組み自体は、業務に差し障りはない	子どもたちが制作したレシピはよかった。客が欲しがった （My ストア大作戦について）食と健康がブームの折から、大変良い企画だと思う。子どもたちの視点から店に意見を言ってもらえるのも良いと思う 食レンジャーのPOP、缶バッジは人気があった 小学校のぱくぱく新鮮発表会は素晴らしかった
プログラムで悪かった点	児童のポスターの内容が、食物、旬に限定されるとやりにくい（関係ない業種があるので） 旬の時期がずれていた（ポスターに月が記載されており、実際には1ヶ月遅れで配布された） リーフレットは、店先に置いてあまり持っていない	すべての店が関心があって、参加するというわけにはいかない リーフレットの内容が少し難しい。インパクト弱い
今後の企画への要望	小学校の学習とつながった取組みは、ぜひ継続したい ポスター、リーフレット、POPの設置は、これまでどおり可能 商店街の中で、ぱくぱくブース（体脂肪測定やアルコールテスト）をやってほしい。 事前の宣伝や場所の確保は商店街でやる 献立の情報提供は重要。健康的な献立を提示し、その材料をそろえるのに、商店街ではどこで何が買えるという情報提供もやってみたい	小学校の学習とつながった取組みは、できる範囲で継続したい 店によってニーズが違うので、個別対応をして欲しい 商店街の広報誌に取組みPRを掲載することは可能 Y商店街のホームページ並びに商店街の有線放送をPRに活用することは可能
スーパー店長	児童の手書きのポスターはインパクトがあり、店の取り組みを印象付けた 客がPOPによって、売り場に興味をもってくれた 食レンジャーのPOPは評判が良く、売り場で指先しながら買い物をしている親子がよくいた リーフレットは内容が難しいと思ったが、意外に、持って帰る人が多かったので驚いた 各売り場の担当者にPOPのセリフを書かせたことで、商品知識を学ぶ機会になり、よかった 冬から春にかけて、青果の売り上げが伸びたのは、この取組みのせいだと思ってい（他の店舗では売上が下落した）	客にとって、健康や食の情報は、プラスになると認識している
プログラムで良かった点	小学校の学習とつながった取組みは、ぜひ継続したい 社員が健康や食事について学習する機会（客とのコミュニケーションのための商品知識を高めるため）	この店舗だけでなく、全店で保健所と共同でプロジェクトを進めるのが理想 献立と健康情報を提供することが今後特に重要（調理する人が減っている）で、スーパーとしても、始めようという考えはある。しかし、やる人がいない、知識がないため、実施にふみきれない
プログラムで悪かった点	特になし	リーフレットは内容が少し難しい、インパクトが弱い

斜体字は、児童が直接的に関わった活動でないものへの反応。例えば、プロジェクトチームで制作した健康リーフレットの設置、食レンジャーのPOPの設置など。

食生活につなげている児童が多かった。表2は、Y小学校児童の「ぱくぱく新鮮発表会」終了時のワークシートから拾った記述の例である。地域内のさまざまな施設に自分たちの知らなかった食事や食への配慮をあることを知り、その結果を自分のものとして受けとめている様子がわかる。また、事後調査の中で、楽しかったこと、心に残ったこととして「My ストア大作戦」のことを記述した児童が多かった。

一方、S小学校でも、事後調査で楽しかったこと、心に残っていることが「ある」と回答した児童のほとんどが、毎月の旬ポスターと「健康ぱくぱく弁当」の販売をあげていた。

以上のように、多くの児童が、学校内での食に関する基本学習よりも、地域や商店街とつながった学習を楽しみ、心に残ったとポジティブにとらえていることがわかった。

3. 保護者の受けとめ

商店街や地域とつながった学習への意見は、「My ストア大作戦」に引率したY小学校保護者21人の感想の中に多くみられた。例えば、「子どもたちにとって、とても良い企画である」、「日常よく利用する場所（コンビニ）の食についての考え方を聞く機会が持ててよかった」、「ふだんはスーパーでしか買物しない。子どもにとっては八百屋に入ることも数回目。良い体験だったと思う」、「店の人に接する様子を見て子どもたちの成長が感じられた」、「子どもたちがどうまとめるか、楽しみだ」、「子どもだけでなく引率した自分にとって多くの学びがあった」などである。特に、児童だけでなく自分にとっての学びがあった、と記述している保護者が多かった。また、こうした学習が実現できたのは、商店街の関係者や保健所の協力があつたからこそで、感謝するといった意見も複数みられた。

4. 商店街関係者とスーパーの受けとめ

両地区の商店会組合役員会での聞き取り、スーパー店長への聞き取りの結果を表3に示した。

児童の学習は、おおむね良好に受け入れられていた。商店街では、児童のポスターやレシピは人気があり、客とのコミュニケーションが増えたという意見が多かった。ただ、食の取り組みなので、

飲食店と食物販売以外の業種が参加しにくいことが難点としてあげられた。スーパーでも、「児童の手描きポスターはインパクトがありよかった」などとよい受けとめがされていた。商店街、スーパーともに、児童の学習とつながった取り組みを今後も継続してほしいという意見であった。

また、商店街とスーパーでは、学校での食に関する基本学習の内容、例えば主食・主菜・副菜の組み合わせや、野菜の旬といった内容と合致したリーフレットやPOPをプロジェクトチームで開発し、それらの店内での掲示と客への配布を行ってもらった。これらの取り組みに対しても、「POPにより客が売場に興味を持ってくれた」、「店員が商品知識を学ぶ機会になった」、「系列全店で実施してはどうか」といった肯定的な意見が多く得られた。

考 察

1. 商店街を巻き込んだ食育の意義

生活習慣病が増加し、医療費の高騰が続く現在、子どもの頃からの望ましい食習慣の形成は社会的に極めて重要な課題とされる。したがって、学校における食に関する指導の充実が一層重要視され、栄養教諭制度も創設された。2004年に中央教育審議会から出された「食に関する指導体制の整備について」の答申では、食に関する指導の充実のための総合的な方策として、大きく3点が示された。1つは学校における一体的取り組みの重視、2つめは栄養教諭の効果的な活用、そして3つめが学校・家庭・地域社会の連携による総合的取り組みである。この学校・家庭・地域社会の連携におけるコーディネーターの役割も、栄養教諭に期待されるところである。

学校での栄養教育に家庭や保護者を巻き込んだ取り組みは国内外に多くみられ、子どもだけを対象とするよりも家庭を巻き込んだ取り組みの方が循環器病のリスク低下には効果的であるとの報告もみられる⁷⁾。近年は、家庭や学校の食環境、すなわち、子どもたちに健康的な食物提供がされているか、健康的な食物が入手しやすい状況になっているか、適切な情報提供がされているか、といった視点を取り込んだ研究も多くなってきた⁸⁻¹⁰⁾。学校・家庭・地域の3者の連携による子どもへの

食育、健康教育に関する報告も、国内外でみられるようになった^{11,12)}。

本研究で実施している商店街を巻き込んだ食に関する学習プログラムは、まさに学校・家庭・地域の連携による取り組みである。こうした学習が児童や関与した保護者に多くの気付きと深い印象を与えることは、プロセス評価結果より明らかである。また、関係した地域側、すなわち商店街関係者やスーパーにも好意的に受け入れられていることも明らかになった。

しかしながら、こうした学習が本当に児童や保護者の日常的な食習慣を望ましい方向へ変容することに役立ったかどうかを検証しなければ、こうした学習の意義を十分に説明することはできない。現在、14年度に実施したベースライン調査と15年度末に実施した事後調査を用いて、児童および保護者の食知識、食態度、食行動、食物摂取状況等の変化を解析中である。その結果、児童や保護者に明らかな変化がみられれば、こうした食育の意義を、科学的根拠を伴って示すことができるだろう。

2. 商店街を巻き込んだ食育推進の条件

最後に、商店街を巻き込んだ食育の取り組みを推進するうえで、考慮すべき点を整理しておきたい。

1点目は、学校と商店街の地理的条件によって、取り組み方は異なるという点である。S小学校は、近くに3商店街があり、児童や保護者も日常的に利用していて馴染みがある。したがって、毎月児童が「旬ポスター」を届けに行くといった活動が可能であった。また、「健康ぱくぱく弁当」の販売を行ったスーパーは、小学校に隣接しており、S小学校の保護者はほとんど全員が「お客様」である。実際、ベースライン調査結果で、野菜と肉の購入先として、地区内のこのスーパーをあげた保護者は98%に昇った。したがって、児童考案の弁当を販売することは、保護者に対する企業イメージをあげるうえでも効果的だったのだろう。一方のY小学校は、駅前商店街まで徒歩15~20分かかるので、児童だけでのしらべ学習には無理があった。また、児童も保護者も商店街に馴染みが薄く、そのことが逆に今回のしらべ学習を新鮮なものとして印象付けたとも考えられる。このように、小学校と地域施設や組織との連携には、両者の地理的条件が大きく影響すると考えられた。

2点目として、小学校と商店街をつなぐ有能なコーディネーターが必要だという点である。本プロジェクトでは主に保健所がその役割を担い、研究者がその支援を行った。コーディネーターは、小学校の学習プログラムのねらいや進捗状況を十分に把握したうえで、商店街の事情も考慮しながら、両者の関係をコーディネートすることが必要である。同時に、単なる連絡調整だけでなく、コーディネートを通じて、学校関係者ならびに商店街関係者の食や健康に対する関心を高め、取り組みへの意欲を喚起し、取り組みを実施・評価していく役割が求められる。今回はモデル事業ということで、世田谷区内2校だけであったが、こうした取り組みを増やしていくには、区内に1つしかない保健所ではとても対応しきれない。世田谷区では、区を5地区に分け、それぞれに保健福祉センターがあるので、センターがそうしたコーディネート役を担っていくことも考えられる。しかし、今後、栄養教諭が各小学校に配置される、もしくは教育委員会に複数名配置されるようになれば、栄養教諭にこそ、こうした地域とつながった食に関する学習のコーディネート役が期待されよう。

最後に、学校と地域の商店街やスーパー、さらには保健所など、さまざまな組織が連携して、子どもの食に関する学習を推進する基本は、関係者が十分にねらいを共有すること、共有できる場をもつことと考える。それぞれの立場には、それぞれの主張があるが、それらを相互に理解し合ったうえで、場合によってはその主張を多少曲げて、いま、子どもたちにどんな食の力を育みたいのか、そのねらいを関係者がしっかりと共有することこそ、最も基本的なことと考える。本プロジェクトでは、協議会という形でその共有のための場を設定した。こうした仕組みづくりも重要な要素である。

今後、子どもたちが、地域社会の中で生涯にわたって楽しく豊かな食を実現できるよう、地域と学校が連携した食に関する取り組みが一層進むことを願ってやまない。

本研究の実施に当たり、ともに取り組んで下さった世田谷区S小学校ならびにY小学校の校長先生はじめ教職員の皆様に深く感謝申し上げます。また、学習に多くのご協力をいただいた商店街とスーパーの方々、保護者の皆様にも心より御礼申し上げます。

文 献

- 1) 武見ゆかり：平成15年度厚生労働科学研究費補助金がん予防等健康科学総合研究事業「行動科学に基づく栄養教育と支援的環境づくりによる地域住民の望ましい食習慣形成に関する研究」報告書，2004
- 2) Takemi, Y. et al. : Development of conceptual models for community-based intervention program of nutrition education along with creating supportive nutrition environment : A case of Setagaya Healthy Kids & Town Project (投稿中)
- 3) 針谷順子：料理選択型栄養教育をふまえた一食単位の食事構成力形成に関する研究－「弁当箱ダイエット法」による食事の適量把握に関する介入研究プログラムとその評価－，栄養学雑誌，61，349-356，2003
- 4) 足立己幸，針谷順子：3・1・2弁当箱ダイエット法，4-18，群羊社，東京，2004
- 5) 岡田加奈子，奈良部晴美，相馬由紀子：小学5年生児童の健康や食生活に関する実態－教育介入を行うための事前調査として，武見ゆかり，平成14年度厚生労働科学研究費補助金健康科学総合研究事業「行動科学に基づく栄養教育と支援的環境づくりによる地域住民の望ましい食習慣形成に関する研究」報告書，15-29，2004
- 6) 佐々木敏：栄養素・食品群摂取状況調査法の開発ならびにベースライン時における摂取状況の評価，武見ゆかり，平成14年度厚生労働科学研究費補助金健康科学総合研究事業「行動科学に基づく栄養教育と支援的環境づくりによる地域住民の望ましい食習慣形成に関する研究」報告書，88-93，2004
- 7) Washington, RL. : Intervention to reduce cardiovascular risk factors in children and adolescents, American Family Physician, 59, 2211-2218, 1999
- 8) Lytle, LA. and Fulkerson, JA. : Assessing the dietary environment : examples from school-based nutrition intervention, Public Health Nutrition, 5, 893-899, 2002
- 9) Neumark-Sztainer, D., Wall, M., Perry, C., and Story M. : Correlates of fruit and vegetable intake among adolescents : Findings from Project EAT, Preventive Medicine, 37, 198-208, 2003
- 10) Carter, MA. And Swinburn, B. : Measuring the 'obesogenic' food environment in New Zealand primary schools, Health Promotion International, 19, 15-20, 2004
- 11) Macaulay, AC., Paradis, G., Potvin, L, Cross, EJ., Saad - Haddad, C., McComber, A., Desrosiers, S. Kirby, R., Montour, LT., Lamping, DL, Leduc, N., and Rivard, M. : The Kahnawake school diabetes prevention project : intervention, evaluation, and baseline results of a diabetes primary prevention program with a native community in Canada, Preventive Medicine, 26, 779-790, 1997
- 12) 吉岡有紀子，神田 晃：食を通じた楽しい子どもの健康づくり－家庭・学校・地域が連携した埼玉県伊奈町「いないちばん健康プラン」の事例，地域保健，35，2-10，2004